



TITLE:

リカルドオの比較生産費説について

AUTHOR(S):

朴, 克采

CITATION:

朴, 克采. リカルドオの比較生産費説について. 経済論叢 1934, 38(5): 1026-1048

ISSUE DATE:

1934-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130444>

RIGHT:

京都市大學經濟學會 經濟叢論

第三十三卷 第五號

昭和九年五月一日發行

論 叢

相續税と登録税との交錯……………法學博士 神戸正雄

節約の矛盾について……………文學博士 高田保馬

人口稠密の原因觀……………法學博士 財部靜治

時 論

日蘭會商の諸問題……………經濟學博士 谷口吉彦

研 究

北海道鯨定置漁業に於ける漁場動員……………經濟學士 岡本清造

相續税の本質……………經濟學士 三谷道麿

リカルドオの比較生産費說について……………經濟學士 朴 克 采

景氣觀測について……………經濟學士 祭原光太郎

說 苑

擴張再生産式について……………經濟學士 柴 田 敬

肥前有田陶業の發達……………經濟學士 江頭恒治

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

リカルドオの比較生産費説について

朴 克 采

一 リカルドオの比較生産費説の意義とその前提

羅紗一單位の生産
に要する労働時間

葡萄酒一單位の生産
に要する労働時間

イギリス

一〇〇

一二〇

ポルトガル

九〇

八〇₁₎

上式は羅紗及び葡萄酒の生産に於て共にイギリスに優つてゐるポルトガルが葡萄酒の生産に於てより優つてゐること、またその反面の事實として共に劣つてゐるイギリスが羅紗の生産に於てより少く劣つてゐることを現はすものである。リカルドオによれば、斯かる條件の下に於ては、國際貿易が成立し、イギリスの羅紗とポルトガルの葡萄酒とが交換される。その理由を彼は次の如く考へる。羅紗對葡萄酒の國內に於ける交換比例は、イギリスに於て $1: \frac{100}{24}$ 即ち $1: \frac{20}{24}$ でありポルトガルに於て $1: \frac{80}{24}$ 即ち $1: \frac{20}{24}$ であるが、今若し羅紗と葡萄酒との二國間の交換比例を $1: \frac{20}{24}$ と $20/24$ との中間の數の何れでもよしとすれば、これによる交換は兩國にとつて明らかに利

1) Ricardo, Principles (Gonner Ed.) p. 115 岩波版 p. 119. リカルドオの表現は甚だ曖昧であるが、本來斯の如き意味に解すべきものである。 Vgl. Gottfried Haefler, Der Internationale Handel, S. 98.

益であるからだ。即ちイギリスの利益は一定量の羅紗と交換して得られる葡萄酒の量が増加することであり、ポルトガルの利益は一定量の葡萄酒と交換して得られる羅紗の量が増加することである。さればこゝから、兩國は各々その比較的優位にある生産條件に従つて國際分業を営むであらうといふ推理が導き出される。これがリカルドオの比較生産費説として知られてゐる理論であり、それは外國貿易の特質及びその利益を明らかにするものとされ、リカルドオ以來外國貿易理論上重要な地位を占めてゐる。

茲に注意すべきはリカルドオは比較生産費なる用語は勿論、生産費なる用語をも使用してゐないといふことである。これらの用語乃至概念はリカルドオの祖述者 J. S. ミルによつて盛んに使用され、爾來經濟學の中に廣く傳播されるに至つたものであるが、ミルは上式に於ける勞働時間を生産費と看做すことにより、イギリス及びポルトガルに於ける羅紗の絶對的生產費の差等は

100	對	90
120		80

〇〇對九〇、葡萄酒のそれは一二〇對八〇であるが二貨物の比較的生產費の差等は

100	對	90
120		80

であると説明し、同一貨物の國際間に於ける絶對的生產費の差等如何に拘らず、異種貨物の國內に於ける比較的生產費にさへ差等があれば、外國貿易は必然的に起つて來るものと解する。²⁾ 所がミルを始めとしてリカルドオの解説者たちは、上式に於ける勞働時間を生産費と同一視することにより問題の本質を少からず曖昧ならしめてゐる。³⁾ 抑々生産費の概念は價值を前提としてのみ成立つものであり、それは歴史的にも論理的にも價值の概念に後れる。而してリカルドオの立場か

2) J. S. Mill, Principles (Ashley Ed.), p. 576.

3) Cairnes, Some Leading Principles of Political Economy, pp. 47-60 参照。

らすれば上式に於ける勞働量は直ちに貨物の價值を言ひ現はすものであるから、國內に於けるミルの所謂比較生産費の差等は、リカルドオの本來の意味では、國內に於ける貨物の相對的價值（交換比例）の相違に他ならない。ミルは國內價格の決定者が生産費であるとの信條からリカルドオの學説を歪曲してゐる。故に私はリカルドオに立ち歸つて、不當にも比較生産費説なる名稱を授けられてゐる彼の命題を次の如く解する。生産條件の國際的優劣が貨物の絶對的價值の國際的相違を來たすと同時に國內相對價値の相違を來たすときは、國內絶對價値のより小なる貨物又は生産條件の比較的優位に對應する貨物を國際的に交換することが相互の利益となり、従つて各國はより有利なる生産に自己の全力を盡すこととなり、このことは遂に國際分業、即ち生産條件の比較的優位に従ふ分業を齎らすであらう、と。

既に明白であるように、この説の前提は國內に於ける生産條件の均等と國際間に於けるその不均等である。その原因をリカルドオは國內に於ける勞資移動の自由と國際間に於けるその不自由に歸せしめてゐる。然るにリカルドオは彼の敘述の不充分から恰かもこの勞資移動の國際的不自由そのものがこの説の眞の前提であるかの如く説いてゐるので、先づ勞資移動の問題をめぐつて幾多の論爭が行はれた。併し私の解する所によればリカルドオの前提が認められるか否かを決定するためには勞資移動の問題を離れて、國際間には競争によつて滅却すべからざる生産條件の差等が存在し國內に於てはそれが存在せずといふことを現實的に確かめることだけで十分であ

る。惟ふに勞資の移動は産業資本主義時代に於ける自由競争の現象形態であり、これによつて國內の生産條件は絶えず均等化への傾向を帯びてゐたことは否定すべからざる事實であり、他方當時に於て、たとへ國際間にも種々の形態で競争が行はれてゐたにしても、産業資本そのものゝ國際的移住による競争は獨立資本主義國間に於ては殆んど絶無であつたが故に、或國の自然條件の獨占到基く生産條件の優秀は永久性を持つてゐたことも確かである。たゞ後世に至り我々は資本集中過程の促進と共に國內に於ても勞資移動による自由競争が行はれなくなつて、例へばカルテル組織内の生産條件とそれ以外の生産條件とは著しく優劣の差を生じて來たし、他方國際間に於ても金融資本の移動が行はれるは勿論、技術の發達が優に自然條件を凌駕するにつれて、國際間の技術に關する競争は漸次生産條件の國際的均等を齎らしつゝあるといふ變化した事實を見る。併しながら今日に於ても種々なる理由により生産條件の國際的不均等は依然かなりの永久性を保つてゐるし、國內に於ける不均等は左程著しいものではないのである。

上述の如く私はリカルドオの前提を、特に彼の生存してゐた産業資本主義時代に關して、そのまゝ認めてかゝるのであるが、たゞ當時の國內に於ても勞資の移動とは別の理由で例外ながら生産條件のやゝ固定的な差等が考へられるのであり、よしまた然らずとしても同一貨物についての生産條件は一時的には不均等であるといふ疑ひのない事實に鑑みて、以下リカルドオの比較生産費説を批判するに當り、ひと先づ彼の命題を國內現象に當てはめて考へることを許されたい。蓋

しかくすることにより國際現象を正しく把握する鍵を握らんがためである。なほこの説が今日の獨占資本主義に於て如何なる意義を持つかを究めるのも興味あることに相違ないけれども、本論ではそれを論外としてひたすらリカルドオと一緒に産業資本主義を眼前において考察することにする。

二 國內に於ける商品價值と分業との關係

比較生産費説はリカルドオの次の命題をその出發點とする。「二人の人間があつて、兩者共に靴と帽子とを造ることを能くし、而して一方の人は何れの仕事に於ても優れてゐるが、帽子の製作に於ては彼はその競争者を凌ぐこと五分の一即ち二割に過ぎず、靴の製作に於ては、その能く彼に勝つことは三分の一即ち三割三步である場合、優れる者が専ら靴の製作に當り、劣れる者が帽子の製作に當ることは、兩者雙方の利益ではないだらうか⁴⁾」試みに之を次の如く定式化する。

靴(一〇〇労働時間につき)

帽子(一〇〇労働時間につき)

甲

一三個

一二個

乙

一〇〇

一〇〇

斯かる場合には甲は靴のみを生産し、乙は帽子のみを生産して例へば靴一三個と帽子一二個半とが交換されるとすれば甲も乙も共に益する。而してこの場合に於ける交換比例は靴一三個に對して帽子最大限一三個、最小限一二個であらねばならぬ。これがリカルドオの考へである。

4) Ricardo, Ibid. 岩波版 120頁。

こゝにリカルドオが見てゐる甲乙二人は明らかに資本家ではなくして單なる生産者である。これを商品生産者と假定することすら早計である。彼等は出来るだけより多くの富を得ることを眼目とし、而もお互の生産關係を感性的に明確に把握し得る状態にゐる。彼等は分業によつてどれだけの利益が生ずるかを精確に認識して、各生産物の必要數量に應じて勞働時間を合理的に分割し、分業による利益の分配を含むところの交換比例をも相互にとつて不公平ならざるよう決定するであらう。蓋し彼等は未だ何らかの支配關係を有しないと見られるから。これを社會と名づけていゝならばこの社會に於ては人と人との總ての關係が極めてハッキリしてゐる。だがそれ故にこの社會は商品生産社會ではないのである。何となれば商品生産社會に於ては全ての社會的生產關係がそれ自體として把握され得ず、商品の價格を通じて、即ち市場を媒介としてのみ窺はれ得るに過ぎなく、この意味に於て商品の價格が人と人との關係を支配し、個人の生産活動を指揮してゐるからである。事態が極めて簡單明瞭である上の甲乙二人の社會に於ては、若し需要と供給とが一致するとすれば、各々はその比較的優位にある生産能力を發揮して分業を營むことに依りより多くの富を造るだらうけれども、我々の現實の社會に於ては人はたとへ自己の比較的長所を知つてゐるにしてもそれに従つて生産してよいかどうかを決定して呉れるものはその特定商品の價格においては絶対にない筈である。故に我々は、次にリカルドオの上の命題を現實の商品生産社會の場合に擴張せしめて各人の比較的長所が商品價格と如何なる關係を有するかを見よう。始

め利潤を抽象して考へる。

國內に於ては價值を決定する生産條件が與へられてゐる。これは、リカルドオに従へば限界的生産條件であるが、⁶⁾しかし正しくは必要數量の貨物の生産において壓倒的な地位を占めてゐる生産條件でなければならぬ。⁷⁾今この價值決定の生産條件に於て靴一個を生産するために一〇時間、帽子一個を生産するためにも同様に一〇時間を要するものとしよう。然るときこの國內に於ける靴と帽子との交換比例は一對一である。然るに甲なる或る特定の人には靴一單位の生産に九時間、帽子一單位の生産に九時間半で十分であると假定する。今甲が新しくこの生産社會に参加して來た場合を考へれば、甲は先づ優れた靴の生産に従事するであらうことは何人にも明白である。併しこれによつて靴の社會的價值は若干低落せざるを得ない。⁸⁾併し靴の社會的價值が九・五に低落せざる限り甲は何時までも靴の生産を止めないであらう。靴の價值が一〇から九・五に低落するのは靴を九時間で生産する者がこの社會に於て數的に優勢になつて來た時である。若し彼の能力が爾餘のものゝ競争圏外に屬するならば、彼は靴の生産による餘剩利益を永久に享受するであらう。反對に乙なる一特定人は靴の生産に於て一一時間、帽子の生産に於て一〇時間半を要するものと假定せば同様な原理により乙はより少く劣れる帽子の生産に従事するであらう。斯くて我々は比較生産費説の原理が或る條件の下に國內現象にも妥當することを知る。⁹⁾或る條件の下にといふのは、比較生産費説の命題では二者のみを對立せしめて各々の生産條件を比較するのであるが、

6) Ricardo, Ibid. 岩波版 53頁。

7) Marx, Das Kapital III, 改造社版第三卷上 150頁 及び Theorie über den Mehrwert, 改造社全集版第九卷79頁。

8) Marx, Das Kapital I. 改造社版第一冊 76—77頁。

9) Vgl. Gottfried Haferler, a. a. O. S. 100.

國內の場合には各人の比較的生産能力を定める標準が社會的平均であるからである。また國內に於ては生産者を中心として見れば分業は固定的でなしに變動的である。蓋し國內に於ては何人と雖も競争に依り優秀なる生産條件を闘ひ取る事が出来るからである。但し先資本主義的單純商品生産社會を問題とする限り、生産條件(生産能力)の差等は概して熟練勞働を中心としてのみ見られるのであり、從つて競争は甚だ行はれ難く、生産力の均等化は甚だ遅々である¹⁰⁾。故に分業は固定的であり又それは略々各人の比較的長所と一致するものと見られる。併しながら我々は生産條件(最極的には價值)と國內分業との關係についてはまさしく次の如く言はねばならぬ。即ち國內に於ては特定貨物について價值決定の役割を演ずる生産條件が與へられており、これ以上の、又は以下の生産條件で生産される貨物も社會内で通用する同じ價值を賦與されるが故に、各個人はより多くの富を得んとして自己の比較的長所と一致する生産業を擇ぶのであると。社會の分業を規定するものが價值であつて、逆に上で引用したリカルドオの命題に於けるが如く、分業を營むのが各個人にとつても社會にとつても利益であることを社會全體が意識してこの利益を生産者間に分配することから貨物の交換比例が定まるものでは斷じてないのである。このことは下述の國際價値の理論と密接な關係を有するものであるから、こゝで特に強調しておく。

次に資本家的利潤の觀點から考へて見よう。我々が一定の瞬間に任意の一國を眺めれば、そこには各貨物の價值を決定する資本の生産條件が與へられてゐる。而して一時的不均等の存在によ

り個別資本はこの價值決定の生産條件に合致するものと、それ以上のものと、それ以下のものと、の三種類に區別され得る。資本家の意味に於て生産條件に差等があるといふ事は、これを別の言葉で現はせば、同一額の投下資本の生産力が相異るといふことである。資本はリカルドオに従つて労働時間に還元される。今任意の一國內に於て、一〇〇なる資本を投下して靴又は帽子を共に一〇個づゝ生産する資本家が價值決定の役割を演ずるものとしよう。平均利潤率を五〇%とすれば、この國內に於て通用する靴又は帽子の價值は共に一五である。然るに或る特定の資本家は一〇〇の資本を投下して靴を一二個、帽子を一個生産する條件の下に在るとすれば、この資本家にとつては靴の生産に於て $\frac{15 \times 12 - 100}{100} = 80\%$ 帽子の生産に於て $\frac{15 \times 11 - 100}{100} = 65\%$ の利潤率を擧げることが出来る。つまり二貨物について共に超過利潤を得るのであるが靴の生産に於てその程度がより高いのである。さればこの資本家はより優れる靴の生産に従事するであらう。二貨物共平均以下の生産條件で生産する特定の資本家についても全然同様なことが言へる。今これらの一群の資本家が新しく生産に参加することゝなればこの國に於ける靴及び帽子の價值が變動を來たすべきは明らかである。¹¹⁾そこでそれに應じて資本の新しい移動を、即ち生産部門の再分配を餘儀なくせしめ、それにより價值及び平均利潤の新しい水準を發生せしめるであらう。

要するに價值と分業との關係、又は利潤と生産部門の分配との關係に於ては常に價值が先行するのであるが、遡及的に考へれば、商品生産社會一般に於ける分業又は生産部門の分配は本來各

自の比較的優位に適應してゐるものと見られる。而してこゝに比較的とは勿論社會的平均に照らして斯く言ふのである。

三 國際價格の決定

國內に於ても同一生産部門に於ては、たとへ一時的にしる、生産條件が不均等である。故に例へばイギリスに於て羅紗一單位の生産に一〇〇労働時間を費すといふことはイギリスに於て必要數量の羅紗を生産する所の、社會的平均的生產條件の下に於ける羅紗生産部門が羅紗一單位を一〇〇労働時間で生産するといふことである。而して國內に於ては勞資の移動による自由競争が行はれ従つて平均利潤率が支配する。同一生産部門の異なる生産條件に基く同一貨物の異なる個別的價值が平均利潤率の成立に伴つて平均化されたものが即ち市場價值¹²⁾であり、この市場價值そのものは需給の通常の状態では平均的生產條件に適應する。故にリカルドオの比較生産費説の命題は之を次の如く解すべきものである。

羅紗一單位の國內市場價值

葡萄酒一單位の國內市場價值

イギリス

一〇〇

一二〇

ポルトガル

九〇

八〇

この國內市場價值を貨幣で言ひ表はしたものが國內市場價格(販賣價格)である。事態を簡單ならしめるために兩國が共通の貨幣制度を採用してゐるものとすれば、上の數字はそのまゝ二國共通

リカルドオの比較生産費説について

第三十八卷 一〇三五 第五號 一〇九

12) Marx, Das Kapital III 改造社版第三卷上147頁。

の價格の差等と言ひ表はすことになる。扱リカルドオに従つてイギリスに比してのポルトガルの優秀なる生産條件を永久的なものとしよう。又國內に於ても上の數字が長い期間に亘つて不變であるとする。上の如く與へられてゐる價格差等の下にポルトガルにより低廉なる葡萄酒がイギリスに輸出されることは明らかであるが、イギリスのより高價なる羅紗がポルトガルに輸出されるとは何人も想像し得ない所である。さればエンジェルはこれを以て比較生産費説の最難關である¹³⁾と見てゐる。東大の油本助教¹⁴⁾も之に加擔してゐる。

抑々イギリスの生産者とポルトガルの生産者とが共に共通的な富の増加といふ觀點に立ち、出来るだけ少量の勞働で出来るだけ多量の物資を獲得するための共通の目的を實現するため或る最高意志の下に完全に統制されてゐるとすれば、比較生産費説の主張は或る限度内で十分に妥當することは明白である。併しこれが我々の當面の問題なのではない。イギリス及びポルトガルの生産者及び消費者は先づ市場を通じて、價格を通じてのみ生産し且つ分配に與る。何人と雖も商品價值を通じて以外には人と人との經濟的利害關係を知り得ない。同様に商品價格の國際的な動きを措いて國と國との經濟的關係を知ることが不可能である。故に私が以上國內に於ける商品價值と分業との關係について考察したやうに、國際間に於ても先づ商品價格の國際的運動をば國際分業に先行する問題として取り扱はねばならぬ。

今イギリスとポルトガルとの間に商品流通が極めて自由に、且つ正常的に行はれるものとする。

13) Angell, The Theory of International Prices, pp. 371—373.

14) 油本氏 商業政策第一部 51—55頁。

即ち商品流通に關する限り國內と國際間の相違はないものとする。事實リカルドオはこの事を暗々裏に前提してゐる。¹⁵⁾勿論運賃をも無視してかゝる。そこで二國は遂に唯一つの共通なる市場を持つことになる。同一市場には同一價格が支配する。そこで葡萄酒と羅紗との所謂國際價格が出現する。この國際價格の落ち着いてゐる一定の水準こそ兩國の生産者が各々その有利なる生産に従事してゐることを示す譯である。然らば上の設例に於て羅紗と葡萄酒との國際價格は如何に決定されるか。私は以下これを問題とする。¹⁶⁾凡そ三つの場合が考へられる。¹⁷⁾

(1) イギリスの人口が兩國總人口の過半數を占めてゐる場合、從つてポルトガルの生産量だけではイギリスの何れの需要をも充たし得ない場合。斯る場合には國際價格の決定者は主としてイギリスである。¹⁸⁾最初ポルトガルは恐らく一二〇なる價格を以てイギリスに葡萄酒を輸出するであらう。何となればポルトガルは何れの貨物をイギリスの國內價値で輸出しても利益を受ける状態にあるけれども、葡萄酒の輸出による利益の方が遙かに大であるから。併しながらポルトガルの葡萄酒がイギリスに流れ込むに従つて、イギリスに於ける葡萄酒の國內價格は漸次一二〇以下に下るであらう。蓋しイギリスに於ける一二〇の價格は葡萄酒の一定數量を前提としてゐるのであり、ポルトガルからの若干の數量が附加されれば最早一二〇なる價格ではこの増加した量を消化し切れなくなつてゐるからである。¹⁹⁾或は略々同じことであるが次の如く言つてもよい。葡萄酒が依然として一二〇の價格水準を保つためには丁度ポルトガルから這入つて來た數量だけの葡萄酒を生

15) 油本氏 前掲書 157頁。

16) 私はこゝで國際價格決定の一般的理法を取扱ふのではない。リカルドオの前提を押し進めばどうなるかを明らかにしようとするのみ。

17) Vgl. Gottfried Haferler a. a. O. S. 103.

18) Marx, 前掲書 150—151頁。

19) Fisher, Elementary Principles of Economics, pp 261—268. Marx, Theorie über

産してゐたものが勢ひ羅紗の生産に従事せねばならなくなる（貨物を二種類に限定してゐる以上斯く解するより外はない）。今 x 量の葡萄酒が輸入されたとする。從來この x 量の葡萄酒を生産してゐたものが今度羅紗を生産すればその量は $\frac{120}{100}x$ である。他方ポルトガルに於ける兩貨物の需給をも從前通りであると假定すればポルトガルで新に需要される羅紗の量は $\frac{8}{9}x$ である。結局イギリスで餘る羅紗の量は $\left(\frac{5}{9} - \frac{8}{9}\right)x = -\frac{3}{9}x$ である。これで羅紗の價格だけが下るといふことを結論する前に、先づ需給の一時的變動による價格の運動が新しき需給の均衡に達するまでには兩國の需給を從前通りと假定して導き出されたところの、イギリスに於ける羅紗の超過分だけに相當する各貨物の一般的價格低落を惹き起してゐることを見なければならぬ。即ちこの場合各貨物の供給量が一般的に増加すると見るのが妥當であり、イギリスの價格水準は一般的に低落せざるを得ない。²⁰⁾ 假りに葡萄酒のイギリス國內價格が一一五に落ち着いたとせよ（これは勿論任意の數であるがこの場合は一二〇に餘程接近することは贅言を要しない）。この價格は兩貨物の兩國共通の新しい需給均衡の状態を示すものでなければならぬ。²¹⁾ それまでにはポルトガルの羅紗生産者は總て葡萄酒の生産に移つてゐるが、イギリスでは尙も兩貨物を生産してゐる。従つて羅紗の價格は一〇〇から九五・八（ $\frac{100}{120}x$ ）に低落する。²²⁾ 何故ならイギリスでは兩方の貨物が生産される以上九五・八と合致しない羅紗の價格は、例へば九七は葡萄酒の生産者を不利ならしめて羅紗の生産に轉換させることとなり、この事は葡萄酒の價格一一五が需給の均衡に適應してゐるといふ前の條件と矛盾するからである。

den Mehrwert 改造社全集版第九卷 79-82頁。

- 20) 他面に於てポルトガルの方から言つても連續的に葡萄酒を 120 の價格では輸出し得ない。國內需要が減退されるからである。
21) この新しい價格水準は同時に葡萄酒の需要が從前に比しポルトガルに於て減じイギリスに於て増加してゐることを示す。

扱、イギリスの國內價格が斯くの如く決定されるのはイギリスとポルトガルとの貿易の結果であり、また二國の綜合的需給の然らしむる所である。だからこれらの價格は國際價格である。

茲に注意すべきは、若し葡萄酒の國際價格を一〇五とすればこの場合羅紗のそれは八七・五となり元のポルトガルの國內價值以下に下るといふことである。併し仔細に吟味すればこんな場合はあり得ないことを發見する。羅紗の國際價格が一〇〇以下に決定されることは既述の如くであるが、ポルトガルの方では如何なる場合に於ても羅紗一單位に九〇以上(勿論一〇〇以下)の價格を支拂ふことを躊躇しない。羅紗の價格が九〇以下に下ると考へられるのはイギリスの生産者による該貨物の供給が兩國に於ける需要を遙かに超過してゐる場合に限るのであるが、併し斯かる事態を惹起するまでにはイギリスの生産者はより多く葡萄酒の生産に従事してゐた筈であり、従つて需給の正常的な過程の下では羅紗の國際價格は必ず九〇以上でなければならぬ。斯くして葡萄酒の國際價格は八〇と一二〇との間に、また羅紗のそれは九〇と一〇〇との間に定まることが確實である。この事は下述の種々なる場合に於ても等しく妥當する。

(2) イギリスの人口とポルトガルの人口とが相等しい場合。貿易前に於て兩國共生産者の半數づゝが各々の貨物の生産に當るものとしよう。前の場合と同様にポルトガルは先づイギリスに葡萄酒を輸出する。輸出量の増加に従つてポルトガルの羅紗生産者は漸次葡萄酒の生産に轉ずること及びイギリスに於ける葡萄酒價格の低落と同時にイギリスの葡萄酒生産者が漸次羅紗生産に移つ

22) 葡萄酒が若し勞賃の主要部分をなしてゐるならばこれ以下に低落する。このことについては下述する。

て行くことが確認される。上の假定に従へばこの場合ポルトガルの葡萄酒生産量だけで優に兩國の需要を充たすであらう。故にこの場合は國際分業が行はれると見てよい。而して先づ葡萄酒の國際價格の決定事情を見るに、イギリスの葡萄酒生産者を悉く驅逐するに足り且つポルトガル國內に於ける葡萄酒の需要を減退せしめない價格は、前の場合とは違つてイギリスの國內價值に接近してゐる或る數ではなく、むしろ兩國の國內價值の中間に當る或る數であらう。それを例へば一〇〇としよう。これに應じて羅紗の國際價格は如何に決定されるか。ミルの國際價值論の見地からすればその最低限は $83.3 \left(100 \times \frac{100}{120}\right)$ 、その最高限は $112.5 \left(100 \times \frac{100}{80}\right)$ である。²³⁾ 併し私はこの場合羅紗の國際價格はその最高限ではなく、むしろその最低限に近いものでなければならぬと思惟する——上述の如くそれは九〇と一〇〇との間に定まるのではあるが——。蓋しイギリスの一方的生産への轉換は全くポルトガルの葡萄酒の壓迫によるものであり、常に僅かばかりの利益がイギリスの葡萄酒生産者を強ひて羅紗生産者に移らしめるのであるから。つまり羅紗の國際價格は一〇〇にではなくむしろ九〇により近い數である。これを例へば九三としよう。

(3) ポルトガルの人口がイギリスの人口に比し壓倒的に多數である場合。この場合も貿易はポルトガルの葡萄酒とイギリスの羅紗との間に行はれ、ポルトガルは兩貨物を生産する。國際價格はポルトガルの國內價值に接近し且つその比率に従ふ。そこで例へば葡萄酒の國際價格を八二とすれば羅紗のそれは $92.2 \left(82 \times \frac{100}{88}\right)$ である。

23) Mill, Ibid. p. 585.

斯くの如く國際價格は相異なる國內價值の中間に定まるのであるから一方の貨物の國內價值の差が小さければ小さい程(1)及び(3)に於て國際價格は益々それらの國內價值に接近し、(2)に於て他方の貨物の國際價格のみが國內價值から遠ざかる。若し一方の貨物の國內價值が同一であるならば(1)及び(3)に於て國際價格は何れかの國の國內價值と合致するであらう。たゞしこれは飽くまでも貿易により何れの貨物の生産力も増進しないと假定しての話である。實際に於ては國際分業に相當するだけの生産力の増進が現はれてゐるべく、これにより貿易開始後に於ては國內價值が何らかの程度に修正される筈である。だから國際價格と國內價值との背離又は一致を論述する場合嚴密なる意味に於て國內價值とは貿易により修正されたる國內價值を指すものでなければならぬ。貨物の一方が加工品であり他方が原料である場合などは貿易による國內價值それ自身の變動も亦著しく大なるべきである。²⁴⁾このことは更に興味深い新しい問題を提起するのであるが、これには立ち入らないことにしよう。

私は以上で専らリカルドオの前提を押し進めて國際價格の決定及び國際價格と國際分業との關係を見たのであるが、然らば斯かる國際分業による利益の本質とその販屬如何。私は次にこれを問題とする。

その前に私は、私の以上の考察と關聯して起るところの比較生産費説に向けられる二つの重要な反駁について一考する必要がある。その一は異れる國の生産費は比較され得ないといふ駁論である。²⁵⁾既述の如く私は國際間に於ける貨物の比較生産費をその相對的價值と看做すのがリカルドオに忠實であると解する。そして勞働價值説からすれば價值は勞働量に還元

24) 作田博士、世界商品價格の決定(經濟論叢第三十一卷第四號及び第五號)參照。

25) Mason, "The Doctrine of Comparative Cost." Q. J. E. Vol. 41, No. 1.

することにより全くこれを比較し得る譯である。自然條件の差等又は人種による能力の差等と雖もそれは同一貨物の單位あたりの生産に要せられる労働量の差等に附着する。故に異なる國の異なる國內價值(本源的には生産條件)を比較することを妨げる何者も存しない。その二は最近バーンズに依つて投げられたもので東大の油本助教等によつて支持されてゐる。實際分業後に於ては果して分業前に較べて生産物の総合的増加が見られるか、然りとも否とも言へない、といふのがバーンズの駁論の骨子である。例解せば

第一例

生産物		イギリス	スエーデン	イギリス+スエーデン
分業前	綿	一〇労働 \parallel x碼	一五労働 \parallel x碼	二x碼
	鐵	一二労働 \parallel y噸	一五労働 \parallel y噸	二y噸
分業後		二二労働 \parallel 二・二x碼	三〇労働 \parallel 二y噸	二・二x碼 二y噸

第二例(第一例の異なる労働量を同一量に換算する)

生産物		イギリス	スエーデン	イギリス+スエーデン
分業前	綿	一〇労働 \parallel x碼	一〇労働 \parallel 〇・六七x碼	一・六七x碼
	鐵	一〇労働 \parallel 〇・八三y噸	一〇労働 \parallel 〇・六七y噸	一・五〇y噸
分業後		二〇労働 \parallel 二x碼	二〇労働 \parallel 一・三四y噸	二x碼 一・三四y噸

「以上二つの例について見るに、第一例に於て分業後は分業前に比してより多量の生産物の得られることは明らかであるが、第二例に於ては綿絲については分業後により多量の生産物が得られるも鐵については却て減少を來たす事實を見る。それ故に綿絲の數量と鐵の數量とを公約し得べき何等かの手段が発見され、これに依つて二財貨數量の増加の比較が可能とならない限り、結局この場合には、分業後に於て生産物の總額が増加したか否かは断定し得られないと言ふことになる。」²⁶⁾この駁論に於て先づ注意すべきは、第一例は各國の生産力の差等を現はすと同時に各國に於ける需給狀態に應ずる労働の分配をも現はしておるが、第一例より引き出したる第二例は第一例に於ける労働の分配を破壊してしまつたといふことである。第二

例に於て鐵の生産が減じたのは第一例からすればスエーデンは鐵の三勞働を支出し得るに拘らず第二例の換算によつて二〇勞働に減じてしまつたからである。たとへ第二例からすれば分業後の鐵の生産が減じてゐようと、スエーデンは尙一〇勞働の餘力を以てより以上の貨物を生産し得るのである。要するに第二例は數字の機械的取扱ひに過ぎず、何事をも表はすものではない。この事を明らかにするために私は一度リカルドオの第二の圖式に戻らう。

靴(一〇〇勞働時間につき)

帽子(一〇〇勞働時間につき)

甲

一三個

乙

一〇〇

一〇〇

これがバーンズの第二例に相當するもので、彼は斯かる場合、分業は靴を増すが帽子を減ずると見る。上の圖式がもし精確に必要な勞働の分配を示すものであるならば、よし甲乙が交換社會を形造るとも、嚴密な意味に於ける分業は成り立たぬ。即ち乙は帽子のみを生産するだらうが甲は二つとも生産せざるを得なくなる。だがこの場合にも少くとも次のことは明らかである。甲乙二人の需要する靴は二三個、帽子は二二個である。若し靴を甲が生産するとすれば $\frac{100}{13} \times 23 = \frac{176}{13}$ 時間足りる。乙は二〇〇時間では帽子二〇個を生産するが尙二個だけ不足する。この二個は勢ひ甲によつて生産されねばならぬがそのためには $\frac{100}{13} \times 2 = \frac{156}{13}$ 時間を要する。かくして甲は $200 - (\frac{176}{13} + \frac{156}{13}) = \frac{76}{13}$ 時間の餘剰を得るのである。反之もし上の圖式がたゞ生産能力の差等のみを言ひ表はしてゐるものとして甲乙の需要する帽子が二〇個以下で十分であるとすれば、この場合には完全に分業が成立し分業によつて生産物總量の増加が見られる。リカルドオの命題を斯く解するならば、また斯く解してのみ、彼の主張たる分業による生産物總量の増加は之を認めねばならぬ。完全な分業でない場合でも生産物の綜合的増加は認められる。バーンズの駁論はリカルドオの眞意をはき違へた淺薄極るものであると斷ぜざるを得ない。

四 國際貿易による利益の本質とその販屬

リカルドオは、國際貿易は富の増加には役立つが國內の價值及び利潤率には影響を及ぼさないと斷定した。²⁷⁾ 即ち彼は、國內生産力の不動の場合に於ても貨物の量が増加されることが國際貿易の利益の本質であるとなし、價值及び利潤率には、たとへ一時的な變動が生じてても、窮極的には

リカルドオの比較生産費説について

第三十八卷 一〇四三 第五號 一一七

従前の水準に落ち着くと看做すのである。そこから貿易消費者利益説が生れる。他方リカルドオは國際間の交換は等價物と等價物との交換ではないと主張した。²⁸⁾併し斯る非等價物間の交換が正當的必然的になれば、それはやがて國內價值相互間の歩み寄りによる國際價格を出現させ、國內價值は最早妥當しなくなることは私の既に展開した如くである。國際價格による交換は國內に於ける價值法則をモディファイする。即ち正常な場合ですら價格は價值から背離する。價值法則は競争が十分に行き届く場合にのみ全的に妥當するに過ぎないから²⁹⁾上述の如き、生産力の國際的差等が永久的であり、且つ貨物の生産量に限度があると假定される場合の國際交換が價值法則に従はないのは勿論である。³⁰⁾だがこの國際交換が國際價格を出現せしむればそれに従つて國內の交換が價值法則(國內的)に依存しなくなる。故にむしろ重要なことは國際交換が非等價物間の交換であることよりも、國際交換はやがて國內交換をば非等價物交換たらしめることである。國際交換は常に價值法則に従はないのではない。即ち生産條件の國際的差等が一時的なものとなれば、換言すれば國際間に於ても生産上の競争が許されるならば(このことは世界資本主義の發達によつて事實化されてゐる)、國際間に自由に流通される商品の價值は、關係諸國の總生産者の総合的な社會的必要勞動量によつて決定される。³¹⁾この場合には國際價值なる用語を使ふべきだと思ふ。私が今まで國際價值と言はずに國際價格と言つてきたのは、この場合と區別せんがためである。だが國際價格が國際價值と一致しても、國際價值による交換は依然として國內に關する限り非等價物交換となる。

28) 同上 120頁。

29) Marx, Das Kapital III 改造社版第三卷上 146頁。

30) Marx, Theorie über den Mehrwert 改造社版第十一卷 285頁參照。

31) 前掲書 305頁。

のである。何故なら國際價值は如何なる場合に於ても生産條件の優れてゐる國の個別的（國內）價值以上であり、生産條件の劣つてゐる國の個別的價值以下であるべきだから。市場の擴大につれて局部的に妥當してゐた價值がより廣い範圍に妥當する價值の中に揚棄されるに至れば、一部分を中心として見る限りそこだけは等價物と等價物との交換でなくなることは國內に於ても確められ得る。要するに國際價值であらうが國際價格であらうが、それは國內價值の綜合から成立つものであり、而もその持つ本質的な傾向は生産力の高い國の個別的價值以上であり生産力の低い國の個別的價值以下であるといふことである。然らば斯る傾向を有する上述の國際價格は夫れ夫れの國に如何なる利害を齎らすであらうか。

比較生産費説に従へば前述の國際價格の例證に於ける(1)の場合は利益は擧げてポルトガルに歸してイギリスには損得なく、(3)の場合はその反對で、(2)の場合は兩國共利益を受けるといふことになる。兩貨物の交換比例のみに着眼し且つ富の觀點に立つならば一應尤もらしく見える。だが私は、貿易前の國內價值以上に賣るポルトガルは全ての場合を通じて利得するが反對の場合にあるイギリスは全ての場合を通じて損失するといふことを強調したい。(1)の場合のイギリスは前より安く賣る代りに又同じ比率だけ安く買ふといふだけの理由で損得なしと斷定するのは不可である。若し生産物の販賣價格の低落がその費用價格の低落と正確に歩調を合せるならば、その販賣價格は窮極に於て價值と一致するものであり、従つて例へば上の(1)の場合に於けるイギリスの元の國內價值以下に決定されてゐる一一五及び九五・八なる國際價格は結局イギリスの新しい國

内價值となつてしまひ、このことはイギリスに於てポルトガルとの貿易なしにそれだけ生産力が増進したと結果に於て同一である。併しながらこの場合イギリスの羅紗の生産により安價な葡萄酒が生産原費として入り込むとしても(勞賃の低落等により)、この要素を除く所の他の羅紗生産諸條件乃至羅紗についての生産力は之を動かし得ないのであるから、羅紗生産條件の一要素としての葡萄酒の價格が一二〇から一一五に、即ち四パーセント弱低落するとしても羅紗を一〇〇から九五・八に、即ち同じく四パーセント弱に下げて賣らざるを得ないとすれば、このことは明らかにイギリスに於ける羅紗生産者の損失なのである。故に彼をして損失なからしめんがためには羅紗の價格が九五・八でなく例へば九八に決定されてゐなければならぬ。この九八は彼の生産物の個別的價值に他ならぬ。これを交換比例について見るも、イギリスの羅紗生産者は葡萄酒を當然一五で買ひ入れることが可能となつてゐるから、この個別的價值で交換されるとすれば彼は羅紗一單位で葡萄酒 $\frac{98}{115}$ 單位を得なければならぬ。然るに彼は依然として従前通り $\frac{100}{120}$ ($= \frac{95\frac{1}{2}}{115}$) 單位をし得ない。同様なことはイギリスの葡萄酒生産者についても言へる。こゝから我々はイギリスの何れの生産者も勞働を浪費してゐるといふことが解る。然らざるためには國際價格が葡萄酒に於ては一一五以上に、羅紗に於ては九五・八以上に決定されることを要する。然るにこの事はイギリスの國內價值³²⁾と國際價格とが合致せざる限り不可能であり、而も二國の生産條件が相異なる限り兩者の合致は到底あり得ない。斯くして我々は或る重大な結論に到達する。即ちイギリスはポルトガルとの商品交換に於て常に無償で一定量の勞働をポルトガルに提供するといふことである。

32) 貿易後に決定される新しい國內價值。

反面の事實としてポルトガルはそれだけ自己の勞働量を節約し得る状態に置かれる。(3)の場合の國際價格は如何なる場合も必ずポルトガルの現在の個別的價值以上に決定される。これはイギリスから一定量の勞働を無償で吸収する以外の何者でもない。典型的な國際分業が行はれ、且つ必ず相互の利益になると說かれてゐる(2)の場合について見れば、國際相對價格は寧ろイギリスの國內相對價值に準するが故に、よしまた然らずとしても國際價格は少くとも國內價值差の中間に定まるが故に、これまたイギリスの犠牲に於けるポルトガルの利得増進であることは最早疑ひを容れない。これを利潤の觀點から言へば以上何れの場合に於てもポルトガルの利潤率は上る。従つて資本蓄積が早められ、イギリスはその反對である。³³⁾たゞし貿易が加工品であるか原料であるかによつてその程度に著しい差異が存するのは事實であり極端な場合に於ては例外すら存するであらう。だが私はたゞ次のことを確言すればよい。即ち現在の生産條件が絶對的に優れてゐる國は貿易によりそれが絶對的に劣つてゐる國の勞働を搾取するのだと。³⁴⁾國際交換が價值法則に従ふ場合はこの關係はなほハッキリしてゐる。³⁵⁾

要するに何等かの程度で國際分業が行はればこれにより綜合的な富の増加は見られ、之を國際分業のみによる生産力の増進と見てよいのであるが、この富の兩國への分配に着眼して消費者利益説を説くことは間違ひで(消費者は原則として生産者でなければならぬ)、貿易による利益の本質は生産者に勞働を節約させることがその本質であり、而もこの利益は生産力の低い國の犠牲に於て専ら生産力の高い國に販屬する。故に獨立資本主義國間に於ては國際價格又は國際價值が出現するまで

33) Marx 前掲書 第九卷 211—216頁參照。

34) 貿易開始後。

35) Marx, Discours sur la question du Libre Echange 改造社全集版 623頁 參照。

36) 既に國內價值は個別生産者間の搾取關係を内包する。

に、生産力の低い國が保護關稅政策を強行する。³⁷⁾ また歴史的には大多數の貿易は國內に於ける餘剩生産物を國外に捌くことから出發し、生産力がより以上高まるにつれて或る國は絶えず自己の低い國內價値で相手國の競争者を没落せしめんと努力する。従つて國內相對價値の低い貨物ばかりでなくその高い貨物をも輸出することは言ふまでもない。だから比較生産費説は歴史的、現實的には殆んど無意味である。この説はむしろ國內に於てより多く妥當し、より多く國內の現象を説明するものと言へる。蓋しこの説は商品流通の自由をその前提とするが、何時の間にかこの前提を貫き得なくなるのが常であるから。

五 結 論

比較生産費説は、それが貨物の絶對價値を問題とせず専らその交換比例のみを問題とする所に人を眩惑せしめるものがある。私が殊更にこの説の命題を國內現象にあてはめて考へたのもこの邊の事情を明らかにする意圖からであつた。貨物の絶對價値から出發してのみこの説の謎は明らかにされ得る。この説は富國の資本蓄積が貧國の犠牲に於て急速に進行することを神聖化したものに過ぎない。私は以上の考察で問題をリカルドオの設例に局限し且つ國際間の特殊なる貨幣現象を抽象したのであるが、これを多數國間の多數貨物交換の場合、即ち所謂世界市場の場合におし廣めても、また世界貨幣を介在せしめても事象の本質は變らない。要するにこの説は先進資本主義國としてのイギリスの自由貿易論の辯護以外の意味を持つものではない。³⁸⁾

37) List Das Nationale System der Politischen Ökonomie. S. 268.

38) J. Gruntzel, Die Freihandelstheorie der Komparativen Kosten, S. 5.